

「教職課程年報第5号」の発刊に寄せて

神戸女子大学・神戸女子短期大学

学長 波田重熙

今年も「教職課程年報」が発刊される時期になりました。年報には、教員採用試験に関して日頃学生がお世話になっている教職支援センターの教職員や各学科の教職担当の先生が、教職教育について常々お考えになっていることや学生への期待についてまとめてくださっています。また、教育実習に参加した先輩たちの実習日誌やセンターの活動記録がまとめられています。教員採用試験を目指す皆さんは、本年報を精読されて具体的な実行作戦を立て、強い信念を持って希望実現に向けて邁進していただきたいと思います。

さて、国が教員養成課程の「6年制（修士）」あるいは「4年プラスアルファ」の導入を示唆する中、中央教育審議会を中心に「今後の教員養成・免許制度の在り方」に関する議論がにわかに熱を帯びていることに、皆さんも強い関心を寄せていることと思います。そこでは、「教員養成・採用選考・採用後の育成」を一体としてとらえ、その総体として教員の資質向上施策を充実する方向で議論が進んでいます。このような教員養成を取り巻く動向の背景には、社会状況や子供を取り巻く環境の急激な変化にも関わらず、現在の教員養成の在り方は、「教員の質」を担保するには不十分なのではないかという社会の不信感があることは間違いありません。従って我々は、学部4年間の教職課程カリキュラムの中で、教職を志す皆さんに自己の課題を自覚し、必要な知識やとくに実践的な指導力を身につけてもらうことに、これまでも増して力を注ぐ必要があると考えています。そのために教職支援センターが果たす役割への期待は大きく、大学としてもセンターに「実務家教員」を増やすことや組織の充実などの支援策を講じる必要があるでしょう。学生の皆さんも、社会の教師に対する期待に応えられるように、どうか資質・能力の向上に努力を惜しまないでください。

さらに、多くの教員を社会に送り出している本学にとって、今後の教員養成・免許制度の在り方はただ単に教育学科の問題にとどまらず、大学全体の今後の命運を左右する問題であることから、関係者が十分に議論し、今後の変化に迅速に対応できる準備をしておく必要があります。教職支援センターが情報収集を担当し、「行吉学園将来構想タスクフォース」答申に関する議論を大学教育推進会議などで進め、教育学科の検討に基づいて文学研究科で始まっている議論と突き合わせるなどにより本学の方向を定め、学生の期待に応えられる体制を整えていくことが肝要とみなされます。

これから教職を目指す皆さんには、変化の激しい時代に生きる社会人に求められる資質・能力や今皆さんが大学で修得に努めている教員の職務から必然的に求められる資質・能力をはじめとして、教師の仕事に対する強い情熱と、教育の専門家としての確かな力量や総合的な人間力を培うことが期待されていると思います。皆さん、大変でしょうが希望の実現に向けてどうかベストを尽くして下さい。教職に関わる教職員は全員、皆さんを常に応援しています。